

「リレー・フォー・ライフ プロジェクト未来」研究助成金報告書

申請分野:[Ⅱ] 患者・家族のケアに関する研究

申請テーマ:患者アドボカシー活動の積極的支援による骨転移診療の改善

研究者: 橋本 伸之

所属機関:大阪府立成人病センターリハビリテーション科

研究の概要:

骨転移は全てのがん患者に起こりうる問題でありながら、その認知は十分とは言えず、重篤な骨関連事象では、防ぎ得たケースがみられる。ことに、脊椎転移による両下肢麻痺は、家族と満たされた時間を過ごすべき進行期癌患者から、自由に動ける体を奪う。

近年、進行癌の加療を継続しながら生活をするがんサバイバーは増加しているが、今後も増加が見込まれる骨転移に関する全国的医療統計は皆無に等しく、骨転移の診療体制が整わないばかりか、基礎的なデータも調査されていない。

一方、一部の医療機関では骨転移キャンサーボード設置により骨関連事象の減少が得られていることが報告されており、このことは新規の医療技術の導入がなくとも、単に診療現場での認識を高め連携を行うことのみで、一次的に求められるアウトカムが得られることを強く示唆している。

本研究では、全悪性腫瘍患者のQOLに多大な影響を及ぼす骨関連事象の全国規模での削減を目的とし、①現時点での病的骨折や両下肢麻痺など重篤な骨関連事象の発生状況を全国調査するとともに、②診療現場における骨転移への認識を高めるために、患者アドボカシー活動を積極的に活用した介入試験を計画した。介入内容は、上記調査結果や診療体制など患者ニーズに関わる情報提供と、日常の留意点など予備知識の普及を基礎とし、ネット上の公開や講演会開催を計画した。適切な医学的支援により、情報の適正化を図ることも本研究の重要な役割となる。一般への認識の向上、ひいては社会的認知が広まることは、がん診療医の骨転移への認識を高める強い作用を持つと推測される。③一次的エンドポイントとして、両下肢麻痺と病的骨折の減少を、二次的エンドポイントとして、がん患者における骨転移への認知度、アドボカシー活動への認知度を、医療機関と講演会参加者へのアンケート調査によりデータ収集する計画とした。

研究の進捗状況および成果:

①骨転移に特化したアドボカシー活動の立ち上げ

関西地域に拠点を置くがん患者団体が共同して、2015年4月任意団体「骨転移 Walk Together」を設立した。事務局を大阪市北区天満におき、設立時の協力団体は、大阪がんええナビ制作委員会、アイデアフォー、いいなステーション、大阪肝臓友の会、がんと共に生きる会、グループ・ネクサス・ジャパンの6団体である。

②アドボカシー活動

設立後の活動は主として告知活動から開始しており、がん政策サミット2015、日本癌治

療学会に会員が参加して全国のがん患者団体に骨転移の適切な知識の普及の呼びかけを行った。またがん対策推進協議会委員を務める会員から、政策提言へ向けた活動を進めている。

ホームページを通じた寄付金や、医療機関で使用する骨転移啓蒙パンフレットによる収入が数件あり、告知活動により今後自立した運営が可能となることが期待される。

また、対麻痺を体験された患者さんがプロデュースしたミュージカル「命はいのち」公演が大阪で開催された。

③ホームページの公開

骨転移に特化したホームページを 2015 年 8 月 1 日に公開した。医療監修を経た多岐にわたる骨転移の情報源としては、国内では類をみないもので、9 月 884 件、10 月 1234 件、11 月 1141 件のアクセスがあり、「骨転移とは」次いで「身を守るための情報」欄が閲覧されている。骨転移の基本的な情報が求められており、情報提供につながっていると考えている。

また Q&A コーナーは骨転移公開講座で寄せられた 100 件近い質問の大多数に回答を掲載しており、一般の方の多くの疑問に答える内容となっている。

④骨転移セミナー・講演

一般の方を対象とするセミナー 2 回、医療従事者向け 2 回開催した。また日本癌治療学会の基調講演にて最新の脊椎転移のリスク管理を報告した。

⑤骨転移に関する調査

予算に限りがあり、関西地区に規模を縮小して実施した。対象は、関西圏のがん診療連携拠点病院 200 施設とし、2015 年 5 月に実施した。しかし、回答はわずか 16 施設に留まった。「病院の地域連携方針に沿って骨転移患者を受け入れているので、データの公開は不可」と回答する施設や、「各診療科で発生している骨転移患者全体を把握することが病院としても困難なため、公開不可」と回答する機関があった。

⑥その他の学術的成果

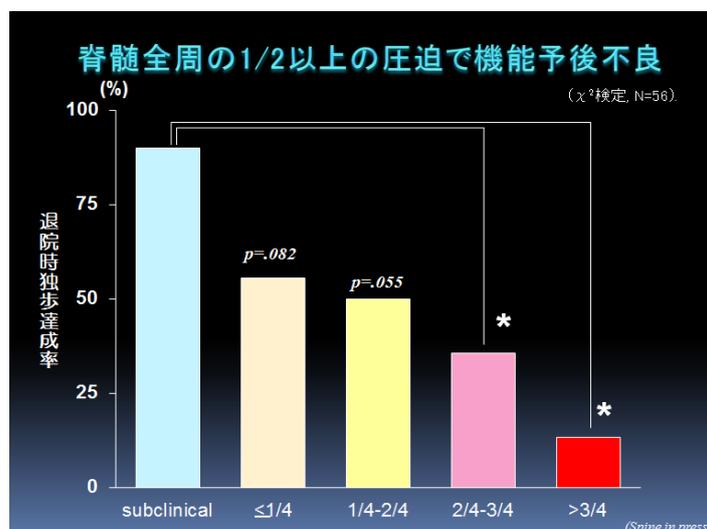
責任著者として、MRI による麻痺リスク評価法を *Spine* 誌に投稿し、現在 in press である。

骨転移が引き起こす最大の問題は、脊椎転移による対麻痺であるが、従来そのリスク評価法は確立されていなかった。神経学的な評価法と画像診断法について投稿準備進めてきたが、後者が現時点までに受理となった。

MRI 横断像 T2 強調画像において、圧迫レベルでの脊髓全周に占める割合が半周を越える圧迫がみられると、たとえ神経学的に歩行能力が保たれていても、機能予後が不良となることがはじめて明らかとなった。すなわち早晩麻痺が出現することを示した結果であり、麻痺が出現してから治療となる症例をより早期に治療に導くことができる可能になる。

脊髓圧迫が麻痺を引き起こす明確な関連にも関わらず、その定量的関係性を立証できた

のはこれがはじめてである。



研究の総括および今後の展望

予算的に当初の計画（とくに実態調査）を全て遂行するのは困難であったが、適切な知識を普及するための人的つながりおよび情報インフラが助成金により整備できたことが大きな進展である。今年度は寄付金は数件に留まったものの、今後の告知活動の結果により自立的な運営が可能となることが期待される。

現況調査は、医療機関の十分な理解と協力を得られず、現時点では十分なデータを集積するには至らなかった。要因として、医療機関の骨転移への関心が薄いこと、患者活動としてもまだ発足直後で患者の声の高まりを広くアピールできていなかったことが要因と考えている。告知活動を継続的に推進し、がん患者団体の連携を強めていくこと、さらにはがん政策サミット、がん対策推進協議会などの場で各分野の代表者と連携を強めていくことを今後の活動方針としている。

本研究の最終的な目標は、骨折や対麻痺など重篤な骨関連事象の低減と骨転移患者 QOL の改善である。対麻痺予防のための大きな課題であった麻痺リスクの評価方法の一つとして、MRI による画像評価法を確立することができた。従来、麻痺の重症度は Frankel 分類に基づいておこなれてきたため、筋力が保持されていれば治療の緊急性はないものと判断されることが多かった。しかし、画像評価は神経学的所見によらず、症状が出現していなくとも早晚麻痺に至る可能性を示すもので、臨床現場での麻痺の予見方法として活用されていくことが期待される。

論文発表

“New MRI features predictive for post-treatment ambulatory function: imaging analysis of metastatic spinal cord compression” Spine in press

学会発表

第 16 回関西がんチーム医療研究会「当院にみる骨転移診療の現状とその対策」橋本伸之
(2015 年 2 月 大阪)

第 53 回 日本癌治療学会 基調講演「がん診療におけるリハビリテーションの視点～脊椎
転移リスク管理への取り組みを例に～」橋本伸之 (2015 年 10 月 京都)

講演会

第 2 回にしわか乳がん市民公開講座「骨症状について」橋本伸之 (2014 年 11 月 西脇
市)

ちゃちゃちゃセミナー「知っておきたい骨転移」橋本伸之 (2015 年 2 月 大阪)

第 8 回地域のがん薬物療法を支える薬剤師養成コース「骨転移診療の現状と課題」橋本伸
之 (2015 年 1 月 滋賀)

成人病センターと訪問看護師の勉強会「これだけは知っておきたい骨転移」橋本伸之
(2015 年 6 月 大阪)

メディアへの掲載

「がんの骨転移を患者から発信・情報サイト Walk Together が始まりました」2015 年 8 月
22 日 医療情報サイト iMedi

その他

骨転移を題材にしたミュージカル「命はいのち」公演 (2015 年 7 月 大阪) (医療監修
支援)